

論壇

働き続けるという選択

私は1951(昭和26)年生まれである。その年の時点での平均寿命を調べてみたら、60歳前後であった。幸いなことに、戦後の経済発展の中で公衆衛生、医療、そして国民の栄養状況が良くなり、平均寿命も大幅に延びている。日本人の平均寿命も80歳を大きく超えるようになった。

平均寿命が長くなったことは結構なことだが、年金や医療や介護などの社会保障制度はそうした変化を反映していない。平均年齢が高くなっているのに年金の支給開始年齢が同じであれば、より多く

伊藤 元重

学習院大教授(国際経済学)

の年金給付の負担となる。それは現役世代への負担の増加という形になる。これでは年金制度がもつはずはない。

国会で大きな騒ぎとなった老後の生活を維持するには2千万円足りないという議論は、数字だけが独り歩きした乱暴なもので

平均寿命と年金支給開始年齢

はあったが、高齢社会の生活を守るために何が重要なのかを考えるよいきっかけになったと思う。老後にどれだけ資金が必要なのかということはその人がどのような生活を求めるのかという点で大きな違いがあるだろうが、可能であれば老後のために資金を貯めておくことをより

多くの国民が意識すべきである。

その一方で、年金の支給開始年齢の見直しということが重要な問題となってくる。平均寿命が延びるのであれば、年金の支給開始年齢をもう少し遅くし、それまでは働き続けるという選択

をより多くの人がとる必要が出てくる。個々人の人生設計に与っても、そして国全体の年金制度の維持にとっても、そうした選択をする人が増えることが好ましい。

向上するシニアの体力

現実にも多くの国では、年金の支給開始年齢を引き上げる動きが見られる。もちろん突然に年金

の支給開始が遅らされては人生設計が狂う人が多く出る。そうした混乱が少ないように、時間をかけた調整となっている。日本もその例外ではない。今は65歳の年金支給開始に向けた調整が行われているが、いずれは67歳とか68歳という話が出てくるだろう。

もちろん、高齢者の体力や健康状態についても個人差は大きい。高齢になるほど、健康での個人差も大きいたらうから、医療や年金の制度の変更もきめ細やかでなくてはいけない。ただ全般的な流れとしては、より多くの人が平均寿命に近くなるまで働ける社会を実現したいものだ。

ただ、年金の支給開始年齢だけが引き上げられるのでは困る。元気な人には年金が出るまで働く機会が提供されることが重要となってくる。元気なシニアの働く機会をどう広げていくのかということも重要な社会的課題となるのだ。

ちなみに、平均寿命が長くなる

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。